

吉野川歴史探訪 吉野川総合開発 その2

～ 分水がもたらす恩恵と対立 ～

明けましておめでとうございます。

別宮川三郎です。寒い日が続きます。皆さん体調に気をつけて、平成最後の冬を健康で乗り切りましょう。

さて、前回号より吉野川総合開発として、吉野川の利水行政のはじまり、明治の終わり頃より盛んに行われた水力発電などについて探訪しました。現在は、早明浦ダム建設を中核とした吉野川総合開発計画の実施により、吉野川の水は四国四県で利用され、その発展に大いに寄与しています。しかし、そこには先人たちの苦労があったことを忘れてはなりません。

特に、分水問題は、利害相反が明確になり関係者の調整が非常に困難です。今回は銅山川から愛媛県への分水の経緯について探訪しましょう。

1. 吉野川の利水の歴史は、分水の歴史

四国の気象は、四国の南側に位置する徳島県、高知県は、台風コースに当たることから日本有数の多雨地域となっています。一方、四国の北側に位置する香川県と愛媛県は瀬戸内海気候帯に属することから、温暖で降雨量が少ない地域で古来より水資源の確保には苦勞し、ため池が盛んに造られた地域となっています。吉野川の利水の歴史は、いわば分水の歴史でもあります。吉野川が四国四県にまたがる大河であり、その豊富な水資源を求めて、藩政期から分水工事が行われ、農業や発電に利用されてきました。

吉野川の分水が最初に実現したのは、かんがい用水として吉野川支川穴内川から高知県の新改川へ導水した甫喜ヶ峰疏水（穴内川分水）でした。明治26年及び明治27年に発生した土佐かんがい史上空前の大干ばつに際して、香長平野（高知平野の東部）は一望枯渇し収穫皆無の状態になり、地元農民たちは、国分川の他に水源を求め、野中兼山が計画した穴内川から分水する工事の期成運動を推進し、関係各所の協力を得て明治29年に疎水工事に着工しました。工事は、現在の香美市土佐山田町繁藤において、穴内川を堰き止めて、甫喜ヶ峰の中腹に延長988mのトンネルを掘り流域変更を行うもので、当時としては画期的な工事で約4年を費やしました。明治33年遂に水路は完成し、その通水を見て関係農民は蘇生の思いであったと伝えられています。

甫喜ヶ峰疏水（穴内川分水）以降、現在までに、仁淀川分水、別子分水（七番分水）、銅山川分水、香川分水が行われ農業用水、発電用水、水道用水、工業用水を各地に供給し、四国の発展のために寄与してきました。しかし、分水により下流域では水量が減ることとなり、渇水期の減水は死活問題となりました。特に、銅山川から宇摩地方への分水は徳島県と愛媛県が長い間争ってきました。それでは、銅山川の概要、愛媛県への分水について探訪しましょう。



図1 穴内川分水イメージ図

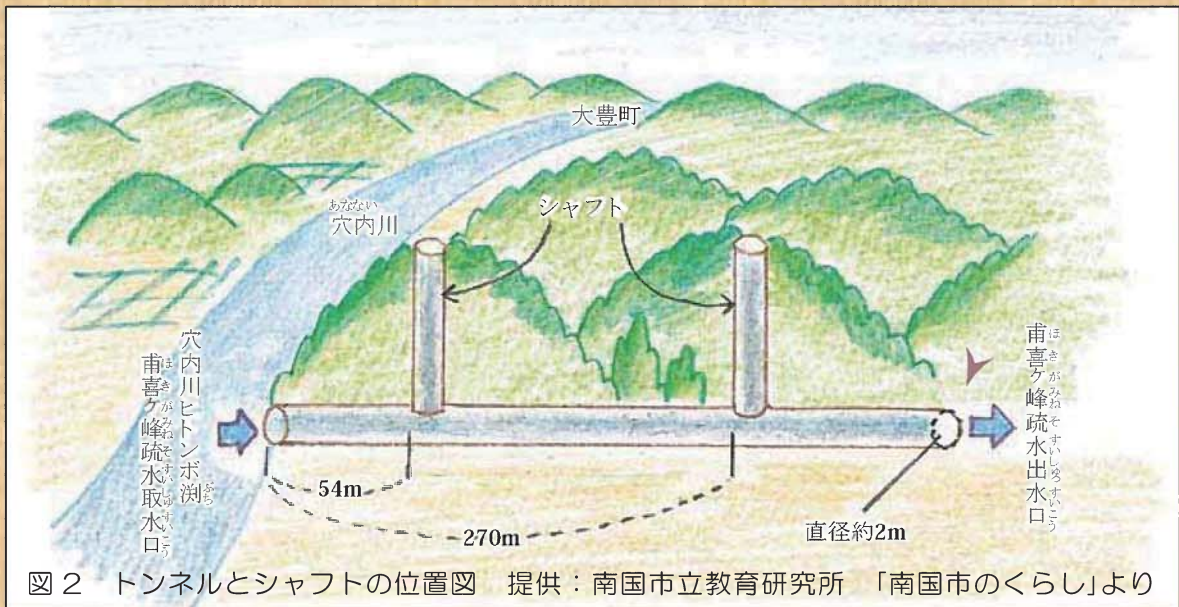


図2 トンネルとシャフトの位置図 提供：南国市立教育研究所 「南国市の暮らし」より



写真1 浦喜ヶ峰疎水出水口 明治33年 提供：南国市立教育研究所 「南国市の暮らし」より

2. 銅山川から愛媛県への分水

(1) 銅山川の概要

銅山川は流域面積 287.8km²、幹川流路延長 63.2km の吉野川水系で 2 番目に大きい支川です。愛媛県新居浜市別子山、旧別子銅山の足谷川を源流として、石鎚山系中の法皇山脈の嶺南地域を西から東へ貫流し、四国中央市富郷町の富郷溪谷を経て流下し、徳島県三好市山城町川口で吉野川に合流しています。

新居浜市別子山村は元天領で銅鉱が発見されたため、元禄 3 年(1690)住友家が幕府の許可を受けて採掘を始めました。藩政期における最盛期の元禄 11 年(1698)の採掘量は 1521 トンを記録しました。また、明治期には近代技術の導入により銅の生産量は増加し大正 5 年(1916)には 9000 トンを越え、全盛期の旧別子の鉱山集落は 2000 人の就業者を含む 10000 人以上の人口で賑わいました。愛媛県新居浜市が今日、東予地域の中核工業都市として発展しているのは別子銅山の開発が起源であると言えるでしょう。

また、銅山川には上流から、別子ダム(住友共同電力KK)、富郷ダム(水機構)、柳瀬ダム(国交省)、新宮ダム(水機構)の 4 つのダムが建設されています。このうち、これらのダムを分水の利用先で分類すれば、別子ダムは、愛媛県新居浜市への分水であり、「別子分水」、「七番分水」と呼ばれています。それ以外のダムは、愛媛県四国中央市へ分水されており、「銅山川分水」と呼ばれています。これらのダムは、愛媛県の東予東部地域への発電、かんがい、上水道、工業用水の分水に欠かせない施設となっていますが、この分水を巡って、新たに水を得る愛媛県と水を失う徳島県で長らく紛争が絶えませんでした。





写真3 別子ダム（昭和41年2月完成）



写真5 富郷ダム（平成12年10月完成）
提供：水資源機構 池田総合管理所

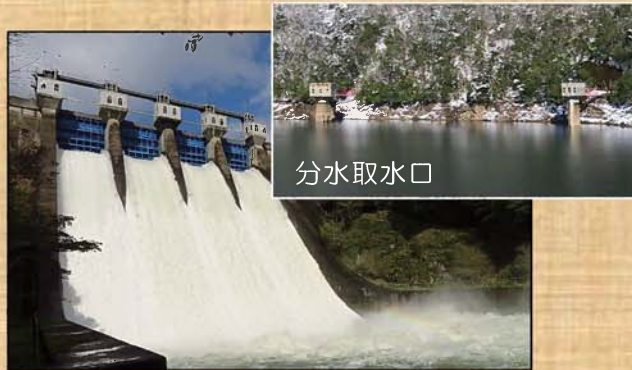


写真4 柳瀬ダム（昭和28年10月完成）
提供：四国地方整備局 吉野川ダム統合管理事務所



写真6 新宮ダム（昭和51年3月完成）
提供：水資源機構 池田総合管理所

（2）銅山川分水 第一次分水協定

愛媛県四国中央市の伊予三島、川之江を中心とする宇摩平野は、瀬戸内海に面して細長く展開しており、すぐ背後に険しい山脈が東西に走っているために川はいずれも短く急勾配で水量も殆どありません。従って古くからこの付近一帯は水不足に悩まされ、絶えず干害に襲われていました。安政2年(1855)宇摩地方は大干害に襲われ、さらに3~5年を周期とした干害が続いて水を求める声はいよいよ深刻になりました。「銅山川の水が引けたら・・・」というため息は農民たちの悲願となり、三島代官の松下節也が、銅山川の水をトンネルで宇摩平野に導く計画を立てたのが慶応3年(1867)でした。しかし、この事業は余りにも大きなものであり、その後も幾度となく地元の有志らによって多くの努力が払われてきたにもかかわらず、その実現には至りませんでした。また、その後の明治政府はこの問題に結末をつけないまま過ごしてきました。「二府県以上にまたがる河川の工作物の設置、流水占用で上流または下流の府県に影響をおよぼすおそれのあるものは、協議しなければならない」という規定ができたのは大正時代であり、松下節也の計画が直ちに実施されていれば銅山川の水は宇摩平野へ自由に分水されていたかもしれません。

その後、大正3年(1914)には、宇摩郡川滝村の紀伊為一郎ら地元有志が疎水事業として、翌4年には東予水力KKが発電事業として相次いで分水事業の許可を愛媛県知事に申請しました。さらに大正5年にはこれらが一体化されて事業変更の出願がなされました。愛媛県知事は内務大臣に出願許可を申請するとともに徳島県に協議を申し入れました。

しかし、この計画は宇摩郡金砂村大字小川字脇に4.8mのダムを築いて、4m³/s以下の水は全て愛媛県へ分水するというもので、徳島県を害する洪水は問題にしないで、渇水期の水をごっそり取られることになり、当然県を挙げての反対となって、大正8年にこの協

議は不調に終わりました。

ところが、大正 13 年またも宇摩地方は大干害に襲われ、愛媛県内では再び分水を望む声が大きくなってきました。大正 15 年に愛媛県が中心となって銅山川疎水事業期成同盟会が結成され、内務大臣にこれまでの計画を変更した新しい分水事業計画を出願しました。この計画は先の計画よりもダム高さを 37.5m と大きくして、分水地点で $2.7\text{m}^3/\text{s}$ 以下の時は全量を下流に放流し、それ以上の時にはダムへ貯留して愛媛県側に分水するというもので下流の流況を悪くしないという考えでした。しかし、この計画についても当然、徳島県は反対の態度を示し、そのため昭和 6 年には内務省が両県知事と協議して、徳島県の渇水期にはさらに下流に対して渇水補給を行うという新しい考えを織り込んだ 7 項目の協定案を作り両県の間をまとめようとなりました。このとき徳島県の一部では、ある程度軟化する気配も見られましたが、徳島県議会では三木熊二をはじめとして強硬な反対論が大勢を占め、ついに昭和 8 年に分水には絶対反対するという内容を盛り込んだ「吉野川保全に関する建議」が満場一致で議決され、協議は再び不調に終わりました。「吉野川保全に関する建議」には、「吉野川沿岸の土地はこの川の水で作られたものであり、ここに発達している産業はこの水がないと存立できない。この水は一市七郡の生存源である。愛媛、高知に分水されるならば吉野川の水はだんだん減退して、阿北住民の生活は危機に瀕することが明らかである。われわれは理由がどうであっても生活を脅かす分水には絶対反対する」と強い分水反対の意思が示されていました。

昭和 9 年、愛媛県議会が銅山川分水事業の促進建議案を可決し、分水の促進を強く要望したのを機会に内務省が再び間に入って斡旋した結果、発電事業を外してかんがい用水のみの分水を目的として、下流への放流量を分水地点で $8.34\text{m}^3/\text{s}$ 以下は全て放流することを骨子とした事業認可案を作成しました。この案は徳島県の意見も織り込まれており、「分水はやむえない」との意見によって、第一次分水協定が昭和 11 年 1 月 30 日に両県の間で成立しました。

【三木熊二と銅山川分水問題】

銅山川の分水構想は安政 2 年(1855)、三島代官松下節也にはじまり解決を見ないまま、昭和 6 年、愛媛県は「銅山川中流に柳瀬ダムをつくり、その水を使う。渇水期には貯留した水を全量放流する。」という提案をしてきました。徳島県側はこれに大反対で大騒ぎになり、この先頭に立ったのが麻植郡山川町川田の眼科医で県会議員の三木熊二でした。

三木熊二は、明治 14 年(1881)4 月 13 日、麻植郡山川町西の原で生まれました。9 歳で川田小学校を終え、明治 26 年(1893)年麻植高等小学校西分校を卒業し、しばらく家業を手伝っていましたが、その後、脇町中学校、第一高等学校、現九州大学医学部に進み眼科を専攻し、明治 41 年(1908)年 28 歳で卒業、明治 43 年(1910)郷里川田村字住吉で内科眼科医院を開業しました。その後、大正 6 年(1917)から川田村村会議員として小学校合併問題、高越山山系の鉱毒問題に取り組みました。また、昭和 2 年(1927)から徳島県会議員を 4 期、昭和 20 年(1945)まで務めました。

三木は県議当選以来、銅山川分水問題の重要性を認識し研究を続け、先ほど探訪した「吉野川保全に関する建議」をまとめ、強い分水反対の意思を示したのでした。この結果、その後の内務省の斡旋案には、水量、流水の管理などについて徳島県の要求が織り込まれ、昭和 11 年(1936)の分水承認に至ったのでした。実に安政 2 年(1855)以来 81 年目のことで

した。そして、三木熊二の名は「水医者」として広く世間に知られることになりました。
 眼科医の傍ら「論語索」10巻等を執筆、その他漢詩、書にすぐれ囲碁は2段級、将棋は初段級だったそうです。昭和31年(1956)9月11日、76歳没。

(3) 銅山川分水 第二次分水協定から第四次分水協定

第一次分水協定によって、長年の懸案であった分水問題もようやく解決したように見えました。しかし、協定成立の直後は、日中戦争、第二次世界大戦と戦争が相次ぎ工事は遅々として進まず、一方、軍事非常体制から第一次分水協定では除かれていた発電事業が再び加えられるとともに、下流への放流量も $8.34\text{m}^3/\text{s}$ 以下だったものが、かんがい期 $4.47\text{m}^3/\text{s}$ 以下、非かんがい期 $2.94\text{m}^3/\text{s}$ 以下へ引き下げられ、徳島県の主張が大幅に後退させられた第二次分水協定が昭和20年2月に成立しました。しかし、戦争の激化に伴い工事は中止されました。

終戦後、愛媛県は中止された工事を再開させようとしたのですが、徳島県より第二次分水協定は戦時下の国策に沿ったもので下流放流量を減らされており、協議が整っていないと異論が出されて再び両県の間で折衝が繰り返され、内務省、四国行政事務局などが間に入り、斡旋に努めました。その結果、第二次分水協定で減らされていた下流への放流量かんがい期 $4.47\text{m}^3/\text{s}$ が第一次分水協定時の $8.34\text{m}^3/\text{s}$ 以下に復活したことなどから、第三次分水協定が昭和22年3月に成立しました。そして、建設省側で検討されていた洪水調節の目的も加えて、柳瀬ダムを多目的にすることにして、昭和24年4月、愛媛県からの委託を受け、建設省によってダム工事が始められました。

その後、第三次協定では明記されていなかったダムの高さを53m以上と明記し、その他にダム工事完成前でも両県の協議によって分水できる^{おってがき}追而書を含めた第四次分水協定が昭和26年3月に成立し柳瀬ダムは昭和28年10月に完成しました。

第四次分水協定までの流れを、吉野川（毎日新聞社編）では次のとおりまとめています。
 (銅山川分水は)「農業用水の分だけ(第一次協定)であったのに発電用水を追加され(第二次協定)、常に愛媛のリードによる交渉を自然流量の貯水ラインを引き上げる(第三次協定)ことによって跳ね返した時もあったが、その後は導水トンネルによるダム完成前の分水も認め(第四次協定)、さらに発電用水の使用量限度を高めたことは交渉ごとに徳島が後退した感じである。三木熊二らの、あの激しい反対は戦時体制で氣勢をそがれ、戦後は多目的ダムによる洪水調節ということで、徳島県の水害を防ぐのだからとなだめられて譲歩を繰り返した形である。多目的ダムの建設には洪水調節の効果が期待できる下流も経費を負担するのが普通であるが、柳瀬ダムの経費を徳島県は一銭も負担しなかった。これは分水承認の条件であったわけであるが譲歩の連続はこんなことに原因があったとも言われる。」

これまで探訪したように、分水は、水を取る側と取られる側では、利害関係が相反して、調整には長い時間が必要になります。銅山川分水の場合、安政2年(1855)に構想され、第一次分水協定まで81年、実際の取水までは、協定を変更しつつ、柳瀬ダムができるまで約100年を要しています。銅山川分水は柳瀬ダムの完成により終結したように見えますが、そうではありませんでした。

その話は、次回、吉野川総合開発その3として探訪しましょう。